

## 2 渚と魚類

### ねらいと成果

近年、水産上の重要な種類を含む多くの魚類の幼稚魚が渚を生活場所としていることが明らかになりつつある。しかし、今までの調査結果は砂浜を対象にしたものであり、岩礁海岸や垂直護岸では調査の困難さから、ほとんど行われていない。ここでは、これらの渚の機能を明らかにするため、夏期に但馬沿岸の岩礁海岸（水深0.3～0.6m）と垂直護岸（水深0.8～1.0m）の渚で行ったスノーケル観察と、刺し網採集による調査から渚に生息する魚類の種類、大きさ、食性及び食害種について検討した。

その結果、渚域には24種類の魚類が認められた。それらは幼魚期から成魚期の段階で、主体は小型種の未成魚期と成魚期の個体であった。また海藻附着生物である端脚類を主に餌としていた。食害種としてはアオリイカ、カサゴ、アイナメ、キジハタが認められた。

### 内容

#### 1 魚類の種類

夜間の観察を含む渚の調査の結果、魚類は24種類観察された（表）。これは但馬沿岸で観察された魚種の35%に当たる。また、夜間では日中観察されなかった種類（マアジ、ダツ、メバル、マコガレイ）が出現した。特異的に多数観察された種類はチャガラ（452個体）とアゴハゼ（106個体）であった。ホンペラは恒常的に多く出現した。

#### 2 大きさ及び発育期

表、図に示すように観察された魚類は全長10cm以下の個体が多かった。量的には少ないが大型種のマダイ、イシダイは幼魚期の個体であった。多数観察された小型種のチャガラ、アゴハゼは未成魚期、ホンペラは成魚期の個体であった。このように夏期の渚に生息する魚類は小型種の未成魚期、成魚期の個体が主体であった。

### 3 食性及び食害種

胃内容物は海藻附着生物である端脚類が主体で、魚類を捕食している個体は認められなかった。

渚より沖合ではアオリイカがクジメ未成魚、メジナ幼魚を捕食していた。また渚では観察されなかった魚食性魚類であるカサゴ、アイナメ、キジハタは沖合で頻繁に観察された。

### 今後の方針

魚類は外敵からの防御のため、渚をすみ場としていることが考えられる。今後はこの仮説をもとに、渚の機能・役割を明らかにしたい。

玉木 哲也（水産技セ・資源部）

表 渚に出現した魚種、大きさ及び個体数

魚種名	全長(cm)	個体数	備考
メジナ	3-7	74	
マアジ	10	4	夜間出現
マダイ	6.8	2	
イシダイ	4	1	
ウミタナゴ	8-12	14	
ホンペラ	8-15	62	
キュウセン	7.20	2	
チャガラ	5-6	452	
アゴハゼ	3-5	106	
ダイナンギンポ	20	1	
ヘビギンポ	5.8	2	
メバル	7	1	夜間出現
ヨロイメバル	6	1	
クジメ	10-15	6	
アナハゼ	5	1	
アサヒアナハゼ	7-13	4	
ダツ	20	1	夜間出現
アミハギ	6	2	
カワハギ	6-12	7	
クサフグ	7-15	5	
コモンフグ	13-15	3	
ナシフグ	15-23	3	
マコガレイ	8	1	夜間出現
トウゴロウイワシ科の1種	5-6	4	

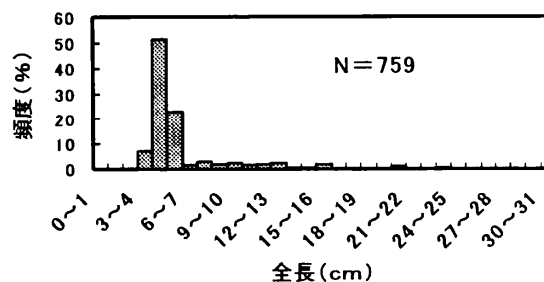


図 渚に出現した魚類の大きさ